

中條帶刀と中條流産科

山形 徹 一

支倉常長（一五七二—一六二二）の慶長使節（二六一—二〇）の隨員として南蛮に渡り、南蛮流産科婦人科学を伝来したとされている中條帶刀については、建部清庵（一七二—一八二）と杉田玄白（一七三—一八一）の「和蘭医事問答」以来、南蛮医学を伝来したと考える学者が多い（富士川游⁽²⁾、大槻文彦⁽³⁾、鈴木省三⁽⁴⁾、海老沢有道⁽⁵⁾、石原明⁽⁶⁾）。

しかし、中條帶刀の経歴は、従来余り明らかでなく、富士川は、三宅意安の「延寿和方彙方函」のなかに、「豊臣秀吉公聚楽城ニ在ル時一士中條帶刀ナルモノアリ、兵ヲ用フルノ暇、医術ヲ好ミ、婦人科最モ奇ナリ」と記してあるのを引用して、「中條氏、帶刀ト称シ、金創及ビ女科ノ治術ヲ以テ名アリ」と述べている。

本論文においては、中條帶刀は南蛮に渡っているか、また中條流産科の実態は何かについて検討することにする。

中條帶刀の家系と経歴

仙台藩儒員の田辺希文（一六九三—一七七二）、希元（一七二—一八三）、希績（一七四—一八一）が編纂して寛政四年（一七九二）に完成した「伊達世臣家譜」並に延宝四—八年（一六七—一八〇）に十石以上の仙台藩土に先祖以来の拝領の由緒を書き出させた「仙台藩家臣録」によると、中條（ナカジョウ）帶刀資種の家系と経歴は次の通りである。帶刀の姓は平氏、上杉輝虎に属して中城に居城した中條越前守景泰（吉江常陸宗信の子で、初名景資、弾正左衛門藤資の養嗣子となり、景泰と改名

す)の次男に生れ、慶長年間伊達政宗に仕えて五百石を賜り、大坂冬の陣のとき、城中に忍び入り、絵図を作って献上し、加増されて九百石となった。しかし、寛永年間に西洋兇徒の事件に連座して六百石に減らされ、隠居して道喜と号し、婦人医として世に行われた。これは父景泰の弟吉江周彰が医師であって、その医術を伝えたと記されている。

しかし、中條帯刀の産科婦人科医術の卓越していたことは、「伊達世臣家譜」巻之十七に次のように註記されていることから明らかである。

「其祖資種在江戸、適奉医薬于大猷廟後宮、敵有廟母夫人得其治療、生敵有廟、依義山公之命、資種秘其術、佐長請官兼追陳此事云」

大猷院は徳川家光(一六〇四—一六五二)の諡号であり、敵猷院は徳川家綱(一六四一—一六八〇)の諡号である。家綱は家光の第一子として寛永十八年(一六四二)八月三日江戸城内に生れたが、生母は贈正二位宝樹院である。また義山公は伊達忠宗(一五九九—一六五八)の諡号である。

中條帯刀がキリシタンであることを密告されて入牢したのは寛永二十年二月から翌年八月まで約一年余で、すでに寛永十二年に転宗していた証跡を認められて放免されたが、家綱誕生に関与したのは密告の一年半前の事柄である。帯刀の医名が如何に高かったかがうかがわれる。

中條帯刀より婦人医を学んだのは帯刀の五男金太夫資房であるが、そのほか朴沢道無行次、鈴木道察重季、中目道怡喜道が帯刀より婦人医を学び、いずれも仙台藩婦人科医員となった。

仙台藩医員百十八家のうち婦人科医員は中條、朴沢、鈴木、中目の四家だけで、これらの家祖が皆中條帯刀の門人であったことは、中條帯刀の医術がすぐれていたことを証するものである。なお、文化八年(一八一二)中目道怡尚碩は内科医員を兼ねることになったので、文政二年(一八一九)二月仙台藩医学校附属薬園長に登用されていた佐々城村安(二七八五—一八六一)が文政三年五月医学校助教(婦人科)に任ぜられた。

中條帶刀の賜った六百石の知行所は志田郡齊田邑で、帶刀の長男五左衛門富命が家督を嗣ぎ、三男権三郎真重は齊藤權左衛門真次の養嗣子となり、柴田郡小野邑で百五十石余の禄を受けた。

富命は寛永事件後祖父景泰の生家の吉江氏を姓としたが、寛文五年（一六六五）十月中條に復姓し、五郎助佐辰が家督を嗣ぎ、佐辰のあとは安右衛門直資、直資のあとは五太夫資清、資清のあとは寛治資始が家督を嗣いだ。しかるに、資始に子が無く、安永六年（一七七七）六月片平新太夫定行の三男六郎兵衛資親を養嗣子としたが、失心風（鬱病）を患って甥を殺害したため、享和元年（一八〇一）三月切腹を命ぜられ、帶刀直系の中條家は断絶した。

なお、大坂城の絵図作成に關しては、「伊達世臣家譜」では、浪散して京師に在った日に大野修理の足輕となり、大坂城を審らかに知っていたので、伊達政宗に仕えて五百石を賜ったのち、大坂城の絵図を献上した、と記されている。しかるに、「仙台藩家臣録」では、大坂冬の陣のとき、城中に忍び入って絵図などをつくり、政宗に指し上げた、と記されている。恐らく、大野修理に仕えた時の記憶を確認するため、大坂冬の陣のとき城中に忍び入ったのもあろうか。

中條養喜とその家系

「伊達世臣家譜」卷之十七（医師之部）によれば、仙台藩医員中條氏の祖は中條帶刀資種の五男中條金太夫資房である。初め伊達綱宗の第二子村知（字鶴千代丸、法名定岳惠印）に仕えて三兩四口（三五・一六石）を賜り、のち綱宗の奥小姓となつて三兩八口（五三・一六石）の禄を受けた。資房は中條帶刀より中條流医術を受け、子が無いため兄富命の二男五郎兵衛佐則を養嗣子とした。佐則も祖父帶刀より医術を受けていたので、官に請うて中條流の治療することを許された。佐則の子平内佐長は中條流医術を学んでいたが、帶刀の家方を伝えた富命の三男齊藤真重が正徳元年（一七一）病死して、正統の中條流の家方が殆ど絶えようとしたので、佐長は父祖の医業を続けることを官に請うて許され、正徳四年養喜と改称して仙台藩医員となつた。

すなわち、中條流の始祖は中條帶刀道喜であるが、仙台藩医員となつたのは養喜に始まると考えてよいであろう。養喜は帶刀改め道喜の曾孫にあたるわけである。

中條養喜佐長の子は養川佐命、佐命の子道記資長が夭逝したので、佐命は嫡孫養順資義を家督とした。資義の子養喜資享は文政二年（一八一九）四月仙台藩医学校の助教に任ぜられた。文政六年十月医学校講師（内科）として鶴岡から着任した小関三栄（後称三英一七八七—一八三九）は同僚の中條養喜より祖先伝来のキリスト教の書籍を借覧したと伝えられている（鈴木省三）。

しかし、小関三英は大槻玄沢（一七五七—一八二七）の依頼で産科学の訳述にあたっていたから、「和蘭産科捷徑並四卷」または「泰西産科捷徑四卷」の訳述に関係して、中條流産科の秘伝書について質疑を交したのではあるまいか。

中條養喜の家祿は資房以来三兩八口（五三・一六石）であつたが、その後は多少の変動があつたようである。これを、私の所蔵する「医家正例録」や「藩医氏字世録」などで検討してみると、中條養喜の子養川は初め老枚八人分（七八・九石）を給せられ、その後三兩八人分（五三・一六石）に減祿されたが、五兩八人分（六四・五石）となり、寛政十一年（一七九九）には老兩四人分（二三・七二石）に減祿された。中條養川の養嗣子養順は三兩八人分（五三・一六石）を受けたが、その子養喜は老兩四人分（二三・七二石）となり、その後三兩四人分（三五・一六石）に復し、その子道益もその家祿を受けた。

「儒医力競鑑」によれば、中條養順は、東側前頭筆頭で、大関大槻玄沢（外）、関脇桑原養好（内）、小結小野寺格安（内）に次いでおり、婦人科医員では朴沢道雲が西側前頭八枚目となっているだけである。したがって、仙台藩では中條家は婦人科の最高權威とみなされていたことがわかる。

すなわち、仙台藩婦人科医員として最も重きを置かれた中條家の流祖は中條帶刀、世に出たのは中條養喜佐長の時である。

慶長使節と中條帶刀

仙台藩におけるキリシタン弾圧は徳川家光（一六〇四—一五二）の勸告により寛永十二年（一六三五）に積極的に開始されたが、すでに元和九年（一六二二）十二月伊達政宗（一五六七—一六三六）は家光の要望を受けて断固たる処置をとらざるを得なかった。このため後藤寿安（一五七六—一六三八）は追放され、イエズス会のカルバリ¹¹神父 Diego de Calvalho（長崎屋五郎衛門 一五七九—一六二四）は元和十年（一六二四）正月四日広瀬川畔で殉教した。

寛永十五年（一六三八）四月自首して転宗したイエズス会のポルロ神父 Jean Baptist Porro（寿安、十太夫、半右衛門 一五七六—一六四〇）の自白を契機として、寛永十五年十月支倉常長の家督の常頼は切腹して、支倉家は断絶し、次いで同十六年十二月フランシスコ会のバラハス神父 Francisco Barajas（孫右衛門 一六一六—一六四〇）やパロマレス神父 Diego de Palomares（市左衛門 ？—一六四〇）が捕えられた。さらに寛永十七年（一六四〇）三月五日、支倉常長とともに渡欧したところのある佐藤太郎左衛門（七十歳）、および中條帶刀の家臣勘右衛門（三十三歳）ら四十三名がキリシタンとして処刑された。

中條帶刀佐種は転伴天連市左衛門の自白（「伊達家治家記録」）および木村新左衛門の訴状（「石母田家文書」）により寛永二十年二月キリシタンとして捕えられ、その後江戸に送られたが、転宗していたことが認められて、放免となった。姉崎正治は寛永十六年山形で捕えられた伴天連ベルナルドウ市左衛門を Diego de Palomares と推断しているが、寛永二十年に帶刀がキリシタンであると白状した転伴天連市左衛門は別人かも知れない。

中條帶刀渡欧説は、すでに建部清庵の「和蘭医事問答」以来仙台の史家の多くが支持しているが（大槻文彦、¹²鈴木省三、¹³菊田定郷）、浦川和三郎（昭43）や菅野義之助（昭49）もその著書のなかで中條帶刀は支倉常長とともに渡欧したと記している。

「伊達治家記録」によれば、「慶長十八年癸丑、九月壬戌小、十五日庚午、此日南蛮国へ渡サル黒船、牡鹿郡月浦ヨリ発ス、支倉六右衛門常長、並ニ今泉令史、松木忠作、西九助、田中太郎右衛門、内藤半十郎、其外九右衛門、内蔵丞、吉内、久次、金藏以上六人氏不知ト云者差遣サル、向井将監殿(註幕府舟手奉行忠勝)家人十人計リ、南蛮人四十人計リ、都合百八十余人、此時、数年本朝ニ逗留セシ楚天呂モ帰国ス」と記されている。しかるに、「大日本史料」第十二編之十二によると、翌十九年(一六一四)三月メキシコ市のサン・フランシスコ寺で常長の随員のうち七十八名が洗礼を受けたが、同年九月イスパニヤのサン・ルカル・デ・パルラメダに上陸した時は随員三十人を伴っており、次いでセビリヤ市に到着した日本人は二十三、四人で、武士は十一二人、その他は護衛兵と記されている。かくて元和元年(一六一五)九月七日ローマ入市に臨んだ常長の随員は、サトークラノジョー、タンノキウジ、カンノヤジエモン、ヤマグチカンジュロー、サトータロザエモンの五名だけで、ほかに、巡礼ハラダカンエモンら二名、日本の名譽の騎士タキノカヒョウエら四名、馬丁トークロ一ら四名、計十名が参加しているに過ぎない。

「仙台藩家臣録」(昭53)には、これらのうち支倉常長と今泉令史だけしか載っていないが、延宝五年(一六七七)二月十七日付今泉七郎右衛門によれば、「拙者亡曾祖父今泉舍齋儀田村御譜代、貞山様御代に御知行三貫二百二十九文被下置被召出候、舍齋儀南蛮へ御使者被仰付参候処、南蛮にて相果申に付、娘に今村長門次男惣吉取合、跡式無御相違被下置、御奉公相勤申候」と記されている。すなわち副使格の今泉令史はメキシコで客死したと考えられる。

また、イエズス会管区長コロス Matheus de Cosmos の要請に応じた元和三年(一六一七)十月九日付の証文に伊達政宗の家臣八名が署名し、その四番目の署名者に松木忠作登明元親があり、また法王バオロ五世の教書と訓示に対する元和七年(一六二二)八月十四日付の奉答文に十五名が署名し、三番目の署名者にとめい松木惣右衛門があるが、「伊達治家記録」の慶長遣使の三番目に記された松木忠作と同一人と考えられる。すなわち、常長とともにメキシコからイスパニヤに渡った随員は僅か二十数名で、残留部隊は慶長二十年(一六一五)四月一日イスパニヤ使節サンタ・カタリーナらに乗せ

たサン・ファン・パウチスタ号でアカブルコを出帆し、同年閏六月二十一日浦賀に到着したが、松木忠作はその責任者の一人として帰国したと考えられる。なお、とめい（登明）はメキシコ市聖フランシスコ教会で受洗したときの松木忠作の教名であろう。

また、元和七年八月十四日付の奉答文に、後藤寿安に次いで二番目に署名した、とんあるんそはしやると横沢将監吉久は、元和二年（一六二六）八月イスパニヤ使節を送りながらサン・ファン・パウチスタ号で支倉常長らをメキシコに迎えに行き、教父であるフィリピン総督 Alonso Fajardo de Tenca の姓名を貰ってドンアロンソハシヤルドの教名を授けられ、常長とともにマニラ経由で元和六年（一六二〇）八月長崎に帰っている。松木忠作も横沢将監も寛永二年（一六二五）に転宗しているが、両者ともに当時はイェズス会に所属したのは後藤寿安との交遊関係によるものであろう。

中條帯刀が常長の随員として渡欧したか否かについては、「伊達治家記録」にも、「大日本史料」第十二編之十二にも記録がない。

しかるに、延宝七年（一六七九）六月十八日の中條五郎助によれば（仙台藩家臣録）、「拙者曾祖父中條帯刀儀、慶長年中真山様へ被召出、御知行五拾貫文被下置、御奉公仕候。大坂冬之御陣に、城中へ忍入絵図等仕指上申に付、為御加増三拾貫文被下置之由承伝候。義山様御代御下中惣御檢地之砌、九拾貫百六拾六文に罷成候処、右帯刀宗門之出入に付、寛永年中江戸へ被召登候節、御加増三拾貫文被召上候。右帯刀儀寛永二十一年八月二十四日隱居願之通被仰付、同氏五左衛門に家督被下置之由、被仰付候」と記されている。すなわち、支倉常長らが南蛮国へ出航した翌十九年十月の大坂冬の陣に参加しているから、南蛮へ同行しなかったことは明らかである。

しかし、寛永十七年（一六四〇）三月、常長の家臣太郎左衛門（七十歳）と一緒に中條帯刀の家臣勘右衛門（三十三歳）がキリシタンとして、つるし殺に処せられ、しかも常長の家督常頼の娘の乳母しいなについて、「此者宗門之義中條帯刀事も存候」と記されているから、中條帯刀は支倉一家と宗門上の関係があったように思われる。

「伊達治家記録」によれば、中條帶刀がキリシタンだったことは伴天連市左衛門の白状によって明らかになったようである。

「寛永二十年二月十六日庚辰、御老中ヨリ、書付ヲ以テ、中條帶刀事、十箇年以前マデ、切支丹宗門ナリ、今ニ、心底
転ブ間敷ノ由、伴天連市左衛門白状ス、因テ、右帶刀ヲ、江戸へ差登セラルベキノ旨、仰渡サル 此後、中條帶刀佐種
ヲ、江戸へ差登セラル月日不知、去ル寛永十二年ニ切支丹宗門ヲ転去スト云フ、正保元年、八月七日壬戌、井上筑後守殿
ヨリ帶刀、宗門転ブ所、慥ナル証跡アルヲ以テ、牢舎御免ノ旨、仰進ゼラル」

すなわち、イエズス会のポロコ神父の白自によってフランシスコ会のバラハス神父やパロマレス神父が捕えられた。次
いで、伴天連市左衛門の白自と木村新左衛門の訴状（「石母田家文書」）によって、寛永二十年二月中條帶刀はキリシタンと
して捕えられ、江戸に送られたが、すでに転宗していたことが認められて放免された。

中條帶刀は出牢したのちは隠居して家督を富命に譲り、道喜と号して医業に従事し、中條流の始祖となった。

これらのことより考察してみると、中條帶刀は支倉常長の遣欧使節には参加しなかったが、かねてよりキリスト教に心
を寄せ、ことにフランシスコ会のバラハス神父やパロマレス神父と親しく、フランシスコ会派の有力なキリシタンとして
支倉一家やキリシタン医師とも交流していたと考えられる。

したがって、中條帶刀が始祖と考えられる中條流婦人科には南蛮医学の影響があってもよいであろう。海老沢有道⁽⁵⁾
が、「中條流の祖中條帶刀佐種もキリシタンであった（中略）。かくて中條流は南蛮流として存続することが出来た」と述
べ、また建部清庵の「和蘭医事問答」を引用し、「天正以前の中條帶刀がごときの大器量の医者有て、蛮国へ渡り妙術を
伝へ来りなば、日本の重宝となる事も有べかりしに、邪蘇宗の禍より、御禁制にて成らざるなり、と嘆じた如く惜しまれ
る」と述べているのはある意味では至言であると思う。

中條流産科書

中條帯刀が徳川家綱の誕生の際に生母の宝樹院の治療に当り、無事出産したことは、中條流産科の卓越したことを示すものであるが、伊達忠宗の命令で秘方とせざるを得なかった（『伊達世臣家譜』卷之十七）。中條流医師が写本で伝えられた理由は藩公の命令による処が大きかったと思われる。

富士川游によれば、安土・桃山時代の医書目録のなかには、「中條流金創」（中條帯刀？）、「中條流摘授全鑑」、「中條流小児方」が記されているが、すべて写本である。

また「京都帝国大学富士川本目録」（昭17）のなかには中條流の産科・婦人科書が中條秘録ら十七種類載っているが、刊本は「中條流産前後書」（寛文八年）と「中條流産科全書」（安永七年）だけである。

富士川游によれば、明和三年（一七六六）賀川玄悦（一七〇〇—一七七七）が「産論」を著して一家言を立ててより産科の術は一変したと記されている。

伊達忠宗の命令によって秘方とされていた中條流産科書が寛文八年（一六六八）に「中條流産前後書」、安永七年（一七七八）に「中條流産科全書」と題して刊行されたのは、賀川流産科の勃興と相前後して、そのような機運が醸成されていたのかも知れない。

「中條流産前後書」は寛文八年三月村山林益がまとめて江戸の通本石町三丁目山形屋吉兵衛より発売したものであるが、私の所蔵本は享保七年（一七二二）四月醉墨斎蔵版として再版され、大坂村上屋清三郎、京都村上屋治兵衛、江戸升屋喜助から発売されたものである。

村山林益は中條流産科を学んだ実地医家の一人と思われるが、跋文のなかで、「右中條流産前後書余年来臨病施治無不応尤済民之功故鋟梓以作一步助矣」と記していることから明らかなように、長年月にわたる実地臨床の経験に裏付けら

れているようである。

実験親試を重んずる古医方は名古屋玄医（一六二八—一九六）に始まり、後藤良山（一六五九—一七三三）、香川修徳（一六八三—一七五五）によってわが国の医界の主流となったが、村山林益が秘方として伝来された中條流産科書を寛文八年（一六六八）に刊行したのは、林益も古医方家の一人だったと思われる。林益の伝記は詳かではないが、元禄四年（一六九一）幕府医官に挙げられて村山流外科全書を伝えた村山自伯（一六四七—一七〇六）の縁者ではあるまいか。

中條流産前上目録は六十四項目より成り、中條流産後下目録は三十三項目より成り、上・下巻併せて九十七項目より成る小冊子である。

産前上の冒頭に、本味（ホンミ）について、「人參沈香下シ度 時ハ倍ス 川芎止セ度 時ハ倍ス 芍薬上セ度時ハ倍ス各等分 白朮甘草各三 分一 右七味水煎シテ用ユ 又粉薬ニシテモ用ユル也」と述べ、最後の第六十四項目では、「早生薬（ハマミグスリ）ニハ香白芷一分 百草霜九分 右海草（フノリ）湯ニテタテテ天目八分ホド用 無効ハ牡丹皮生ト焙タルトニ色粘（ノリ）ニ押マゼ手ノ内足ノ裏ニ付ベシ ソレニテモ無驗ハ是ホドニ丸シ子壺ヘサスベシ」と記している。

また、産後下の最後の第三十三項目では、「振薬（フリグスリ）産後血道血運ヲ治 人參川骨各二分 肉桂桂心各一分 茯苓各一分 甘草少右絹ニ包ミ振出シテ用ル也」と記されている。

これらの項目では、症状に対する処置が具体的に示されているのは古医方の原則に合致している。

しかるに享保七年（一七二二）再版されたものは一冊にまとめられているが、内容は寛文八年本と全く同一である。なお、本書の最後に醉墨子が識している跋文によれば、「此書原版鏤版於東都、時遭火災為烟塵矣、爾後余得善本而登梨棗、玆歲甲辰回祿亦奪去、為因此按之、此書昔時得之鬼遺、以故假手於祝融、齎此秘方流布于世、而如斯歟抑々不可知也、今更訂正彫之、君子以此書勿為尋常之看」と享保九年四月に記して、施術に慎重なる態度を要請していることは注目すべきことである。

安永七年（一七七八）十一月刊行された「中條流産科全書」は、村山林益が寛文八年（一六六八）三月刊行した「中條流産前後書」に小補を加えたものを、さらに旭山戸田齋が宝暦元年（一七五一）に増補したものである。このことは、巻首に村山林益の寛文八年の「中條流産書跋」を掲げ、巻尾に「予嘗撰中條家産書小冊、令書肆某氏梓焉、其書大行于世而猶燼其多遺漏、探櫝中、撰切日用者數十条与之、以小補於産科者流云爾」という林益の撰文を載せていることから明らかである。

戸田旭山の序文によれば、「其中有中條氏在焉、以善治産難、鳴固非虚名也、今也其徒數十百人分所海内而救其難者指不勝屈、一日書肆醉墨斎一帙来、謂予曰、吾嘗梓村山氏所撰中條産書小冊 大行于世、今復欲寿梓其後扁増補、希公校正之、盖其為書、不必依古人方論、皆書一家經驗以郷語、以大方之家多不信也、雖然予屢試之極効、則是書有大補於濟世者可知已矣」と記されていて、中條流産科の実務に従事している医師が全国で数百人に達していたことを示している。

本書の体裁は、初篇の項目は十五、産前方の項目は一五三、産後方の項目は一一四、計二八二項目に達し、「中條流産前後書」の九七項目よりはるかに増補されたものである。しかも、村山林益と同様に、戸田旭山も「予屢試之、極効」と記しているから、旭山も林益と同様に古医方家の一人と考えられる。

本書の冒頭に、「本味」を掲げたことは前書と同様であるが、第二項目の加減法のなかの「口上」について、「私ニ曰、右薬味ノ中、口上ト云フハ中條流極秘口伝ノ薬ナリ、旧板是ヲ不録、其製法今具サニ奥ニ記ス」と述べていることは古医方家の面目躍如たるものがある。また第五項目の「生産月数ノ事」の初めに、「婦女孕ム事経水畢テ十日ノ内ニ孕ムナリ、是レ過テ後孕ムコトナキ物也」と記しているのは多年の経験にもとづいた見識である。次に「産前方」の第一項目は「不食シテ煩フ事」であるが、「斉按スルニ此症華人惡阻（ヲソ）ト名ク」と記して、対症療法を述べている。その他の項目でも、「斉按」を付記しているのは十六個所にも及んでいる。そのなかには「産前」の第四十八項目の「チカヤノ煎湯」に對して「斉按スルニ古来茅ヲチカヤトヨムニ依テ誤レリ、茅ハツバナ也、血ヲ止ルノ効アリ、故ニ茅根（パウコン）ノ煎

湯可ナリ」と述べ、また、「産後」の第四十八項目の「茨(イバラ)ノ根ニ色ヲ加ヘ用ユベシ」に対して、「齊按スルニ此イバラハ即チ本草ノ薔薇根ナリ」と述べていることから知られるように、和漢の本草学に対する深い造詣を窺わしめる。

戸田旭山は、⁽¹³⁾「大坂の医者なり、名は齋、旭山は其の号、または無悶子、百卉園の号あり、齋宮と称す、備前の人、本姓は鈴木氏、出でて戸田氏を嗣ぐ、最も本草に精し、旭山治病に長ず、而して諸病を以て皆湿邪の感招する所となす。治方湿を駆るを先となす、故に世称す、旭山の万病を治する一に水毒に帰すと、嘗て非薬選を作りて香川修徳を駁す、また其の才を嘉みし、子をして就き学ばしむ」と記されており、古医方家の香川修徳と同時代の本草にすぐれた医者であった。

中條流産科は伊達忠宗の命令で秘方として伝来していたから、本書のなかでも、初篇の第二項目の「加減法」のなかで、「口上ト云フハ中條流極秘口伝ノ薬ナリ」と記されているほか、「産前」の第十九項目の「痢病」のなかで、「又秘方奥ノ薬方ノ部可考」、第五十六項目の「母反張(フリケ)」のなかで、「不効ハ口伝ノ灸アリ」、第八十項目の「血塊ヲ解ク事」のなかで、「惣ジテユルユルト養生スル時ハ酒ノ用ヒヤウ口伝アリ、不治ハ又生ニテ用ユ、此方口伝多シ」、第一百十項目の「産ニ臨ミ母ノ胸ヘ子上リ生レカヌルコトアリ」のなかで、「是第一ノ口伝ナリ」、第一百十六項目の「小腹張りテ子返シカヌルハ」のなかで「口伝アリ」、第一百五十一項目の「後産子宮ニ入ルコトアリ」のなかで、「口伝ナリ」、また「産後」の第十八項目の「産後反張ノ事」のなかで、「反張ニ荊芥ヲ用ユ、是秘事ナリ」、第二十四項目の「産後ニ子宮出ル事」のなかで、「口伝アリ」、第二十五項目の「産門返リ出ル事」のなかで、「口伝ナリ」、第五十九項目の「久シク腰ヌケ煩フ事」のなかで、「付薬アリ、口伝ナリ」と述べていることは、中條流産科が秘方として伝承されていたことを示している。ことに「中條流産科全書下巻」に「別録口伝之薬方」として五十二種類を解説してあることも秘方として長く伝承されたことを証明するものであろう。

中條流産科に関する医書のどこにも中條帯刀や中條養喜の名が記されていないのはそのためと考えられるが、中條流産

科書が後世に伝えられたのは、江戸の村山林益と大坂の戸田旭山によるもので、とくに旭山の「中條流産科全書」に負う処が多い。

なお、本書のなかに、中條流小児方の十二方が述べられていることも、中條流医術を理解するのに便宜である。

むすび

支倉常長の慶長使節（一六二二—二〇）に随行して南蛮流婦人科学を伝来したと考えられていた中條帶刀について、その経歴を検討した結果、帶刀は南蛮国には渡らなかつたが、キリシタン武士の一人として支倉常長の一家やフランシスコ会の宣教師あるいはキリシタン医師と親交を結んでおり、転伴天連市左衛門の自白と木村新左衛門の訴状によって寛永二十年入牢したが、すでに転宗していたことが認められて一年余で放免された。それ以来隠居して道喜と称し、叔父吉江周彰より伝えられた婦人医として世を送った。帶刀は寛永十八年八月徳川家綱（一六四一—一八〇）の誕生に関与する程の卓越した技術を有していたが、伊達忠宗（一五九九—一六五八）の命令で秘方とされたため、中條流は秘伝として世に流布されることになった。

中條流産科婦人科をもって初めて仙台藩医員に登用されたのは帶刀の曾孫の中條養喜であり、仙台藩の婦人科医員四家の筆頭として幕末に及んだ。

中條流産科書が世に出たのは村山林益の「中條流産前後書」（寛文八）で、戸田旭山の「中條流産科全書」（安永七）によって一般に流布するに至ったのである。

（第85回日本医史学会講演要旨）

引用文献

（1） 建部清庵・杉田玄白「和蘭医事問答」 寛政七

- (2) 富士川游「日本医学史」明治三七
- (3) 大槻茂雄「磐水存響」大正一
- (4) 鈴木省三「東藩日新医事略説」大正一五
- (5) 海老沢有道「切支丹の社会活動及南蛮医学」昭和一九
- (6) 石原明「日本の医学」昭和三四
- (7) 山形敏一「小関三英覚書」(「日本医史学雑誌」) 昭和五四
- (8) 山形敏一「慶長使節と南蛮医学」(「日本医史学雑誌」) 昭和五八
- (9) 浦川和三郎「東北切支丹史」昭和三一
- (10) 菅野義之助「奥羽切支丹史」昭和四九
- (11) 菊田定卿「仙台人名大辞書」昭和八
- (12) 富士川游「日本医学史綱要」昭和八
- (13) 田口卯吉「大日本人名辞書」昭和三三

Tatewaki Nakajo and the Obstetrics of Nakajo Ryū (Nakajo school)

by

Shoichi YAMAGATA

Tatewaki Nakajo, the founder of the Nakajo school of obstetrics, served Tadannune Date (1599-1658) and was taught medicine by his uncle Kanenaki Yoshie. He was not a member of the Keicho Mission (1613-1620) of Sunenaga Hasekura(1574-1624) but was a Christian and was acquainted with

Franciscan fathers and Christian doctors. He was a close friend of the Hasekura family, and was once prosecuted for his Christian belief and was imprisoned for that reason. He was acquitted after giving up his religion, retired, changed his name to Doki, and started to work as a doctor. As it is evident from the fact that he attended the birth of the fourth Tokugawa Shōgun Ietsuna Tokugawa (1641-1680) in Edo castle, he was a famous and renowned obstetrician but his methods of obstetrics were kept secret by the order of Tadamune Date. Yōki Nakajō, a grandson of Tatewaki was the first one from his school to be nominated as a formal member of the doctors of the Date clan. The school of Nakajō had several hundred followers scattered all over Japan but the first publication of a medical book of the school was done by Rineki Murayama in 1668. This is the Nakajōryū Sanzengo-Sho. This book and the second publication in the name of Nakajōryū Sanka-zensho in the hand of Chokuzan Toda in 1778 made the obstetrics of the school of Nakajō popular.